

いのち

もくじ

I	越冬対策実行委医療班として=前史	1
II	医療を考える会の結成について	5
III	5・14健康診断	9
IV	医療ニュースの発行と医療相談を通して	12
V	医療を考える会の今後について	15
資料		22

創刊号

いのち 創刊号 1972年8月4日 発行
〈編集・発行〉 釜ヶ崎医療を考える会
連絡先 大阪市西成区英田4-4 電話(06) 631-2383

50円

工越冬対策実行委医療班として「前史

一九七〇年一月～一九七二年一月

〈関連資料〉

- ・ピラ「釜ヶ崎労働者の健康を守り、医療の名による人権無視を打ち破ろう！」
- ・「日刊えっとう」
- ・問診表 及びその集計
- ・その他健康診断に関する若干の記録

越冬対策医療班報告書

I 生命を守るために俺等自身の手で越冬対策を

一九七〇年一月初めより、釜ヶ崎の冬にむけて労働者の生命を守る闘いが始められた。釜ヶ崎では、毎冬になると仕事が減り、年末から一月半ばまでほとんどの労働者が仕事につけず、飢えと寒さの為に路上や公園の片すみで死んでいく者もいる。その数三〇人以上とか、今まで、行政に対して「一人の凍死者も、一人の餓死者もだすな。行政は定められた任務をはたせ」と要求してきたが、満足な回答は何一つかえってこない。役所も病院も正月は休んでしまうのである。「仲間を見殺しにするな。困っている仲間同士で解決していこう。労働者自身のつくりだす釜ヶ崎の正月を作ろう」ということで、全港湾西成分会を中心にして、団体・個人参加で越冬対策実行委員会がつけられた。

オ一回越冬 一九七〇年末（一九七一年初

夜間パトロールで病人を発見し、病院送り三

その中で医療班の必要性がいわれ、一、重病者の発見と病院送り、二、ケガ人、衰弱者の救済、三、健康診断の実施、をめぐって準備にかかった。

II 医療班の具体的な報告として

一二月二五日より一月四日まで、四条ヶ辻公園を中心に越冬対策の諸行事が展開された。

夜間パトロール 一二月二五日から一月四日まで、

病人・泥酔者保護のために数名ずつのクルーに別れ夜間パトロールを続けた。病人は病院へ送る、衰弱者はテントへ、軽いケガなら応急手当をするという原則の下に。

救急車で病院送り八名（骨折、熱発、切傷、心臓病、その他）

病人用テント収容状況 三〇人位収容できるテント

トを一二月三〇日から一月三日まで設置した。

夜間パトロールで発見した病人や衰弱者をまずテントに収容し、医師の診断の下にできるかぎりの医療処置をした。ほとんどが何日も食事をしておらず、アオカン（野宿）をして

八名

にぎりめし炊きたし一六〇〇食 宿泊施設へ送る二〇〇名

この時、私も、夜間パトロールや炊き出しに参加して、初めて釜ヶ崎の地に足をふみ入れた。その時のかすかな記憶として、何億という予算で作られた医療センターの前で重病者が何人も寝ころがっていた時の驚きと怒り、私達は何の医療設備もなく救急車を呼ぶことしかできなかったが、釜ヶ崎における医療行政というものがどんなに現実的に即していないものか知らされた。

その年一年間釜ヶ崎では、野合釜ヶ崎メーデー、私圧よりの抗議行動、またよりの抗議行動、北条福山鉄工争議への権力の介入、と、労働者の数多くの抗議と怒りに権力の弾圧があびせられた。その間、何か少しでも良くなったものがあるだろうか。不況の刃が釜ヶ崎にまともにおしよせてきた七一年も、又、オ二回越冬対策実行委員会にせまられて活動を開始した。一昨年以上の人員と予算と労働者自身の組織化をめぐって、数多くのプランがねりあげられた。

(2)

いたせいで、食事と睡眠と保温が何よりも大事だった。それほど衰弱していない人達はテントの外にたき火のまわりで夜をすごして、そろわねばならないほど常時満員であった。

応急処置 テントの一角に医療用品をおき、訴えのある者に投薬や応急手当をした。

風邪薬五〇、胃薬五〇、せき止め二〇、他の

うどめ一〇、やけど二〇、創傷一〇〇

健康診断 一月二、三日、越冬に参加した労働者

を対象に健康診断を行なった。

検尿、血圧測定、医療相談等、

高血圧の人が多くいたが、ほとんど治療して

いない。心臓病、糖尿病、心臓病等の反応

があった。肝臓障害は既経歴の中で最も多か

った。健康診断でどこか体の悪いところのみ

つかつても、健康保険がなく、飯場を転々と

している人が多いので治療をうけない人が多

かった。

入院必要者の病院送り 入院希望者や入院必要者

のため、中央更生相談所を通じて病人を送っ

(3)

た。ノ左ノノ右 五〇名

阪和病院、大和中央病院、医療センター等、
入院者に対しては、下着、洗面具のさし入れ、
その他の連絡をとるために面会に行った。

医療班の人員は、のべ数一五人程、医師、医学生、
看護婦、その他いろいろな人達が病人の世話や病院ま
わり等やってくれ、二四時間ほとんど休みなしにテ
ント内の管理におわれ、ばなしであった。最初の目
標であった重病人の新院送り、一人の死者も出ずま
いといふことは、短期間であったがやりとげられた。
ただ、噂によると、私達の目の届かない所で三名の
死者が出たらしいといわれている。

越冬対策のその他の部門では、炊きだし 三〇〇
〇食、宿所送り二六〇人、演芸大会、ソフトボー
ル大会、さもう大会等には、数多くの労働者が積
極的に参加した。

Ⅲ 越冬を終えて

病院へ送った人達の面会で、救急病院のヒトイ待
遇のことが数多く訴えられた。十一〇日閏も医師の

回診がなく、ただ注射のみうたれた」「食事が悪い
し、寝かされているだけ」日頃から、各病院や行
政に対する労働者の不満はよく聞いている。労働者
の怒りや不安を少しずつでも集約し、新たな斗争の
バネを作りあげるため、医療班は労働者との接触を
日常的に作りだしていきたい。健康診断、医療相談、
行路病死者の調査、各病院の実態調査等、多くの課
題が私達に残された。

(江口さみ子)

Ⅱ 医療を考える会の結成へ

一九七二年二月～四月

△関連資料▽

- ・ 医療班連絡用ハガキ
- ・ Mさん・Aさん・Sさん関係手紙他記録
- ・ 内部ビラ「Sさんの死亡事件について」
- ・ ビラ「釜ヶ崎の医療はどん底だ／俺等の生命は俺等を守るう」(四・一〇)

医療を考える会結成について

金ヶ崎医療を考える会結成のきっかけになった、具体的な事柄を説明することからはじめたい。

Ⅰ 越冬対策医療班で発行した連絡はがきがきっかけで、正月、救急病院H病院に入院した金ヶ崎労働者Mさんと連絡を保っていた。ところが、彼から、H病院からS精神病院に送られたとの連絡が届いた。その時の手紙の抜粋を紹介する。

「私は病院生活H病院と此処の二回目ですが、此処へ来てから病気が重い。こう快復せず、動物園の猿回様の日々を送っています。一般病院へ転院しようと思つのですがそれも出来ず非常に困っています……」

その後、こちらから面会にい、たときは、釜の仲間が田舎して改善斗争をくみ、Mさんも粗房のよう

なところに入れられたりしたけれども、かなり改善されたようだ。

それからしばらくの期間で、彼は比較的スムーズに退院できた。(彼が医療ニュースによせた投書—五月一日号—参照)

② 二月の中旬、釜の労働者が一人病院で死んだ。救急車で、西成のある救急病院へ運ばれて三日後、それも精神病院でのことである。彼はSさんという行旅病者であり、入院の次の日、精神分裂病と診断され某精神病院へ転院、その次の日の朝死したのである。

死亡診断 食道静脈瘤破裂、肝硬変、酒精中毒
金ヶ崎労働者への差別と偏見を根底に、腐敗した医療によって金ヶ崎労働者は殺されていく。その責を追求する為、Sさんの死を無駄にしない為……労働者数名が決起し病院への徹底追求を試みた。数回集会をもち、Sさんの家族と連絡をとり、病院に経過を調査にいった。

家族の手紙抜粋

「病院でさいた経過はつぎの通りです。Sは一四日午後六時頃前の病院から移送され、翌一五日朝七時五分に亡くなった。病名は、食道静脈瘤破裂、肝硬変、酒精中毒の事でした。入院時は六分重体で妄想のうわ言を云っていたが苦痛は訴えなかつた由です。S精神病院でも一晩だけの事であまり詳しくは解からないとのことでした。丁度亡兄の友人という人が、家族がこなければ骨を拾ってくれる心積りで来たといつて、病院でお会いしましたが、この方の言で「前の病院の院長先生が誠意がなく、死亡についても納得がいかない」と言つて、これから前の病院へ行つていろいろさいてみるよう助言してくれましたが、私共も悲しみに加えて、前夜からの徹夜運搬の為、大変疲れており、また、市内不案内にて道も迷つてしまふ心配がありましたので、すべては壽命とあきらめることにしてそのまゝ帰宅し翌日ささやかな奔儀を行つた次第です。」

奔儀は行なつても病院と闘うほどのものはない。病院では、家族以外には話せない医療法をたてに口を閉す。我々はもう何をすればいいのか。しかし、これが金ヶ崎労働者の実態なのである。身寄りをなくみまいにくく人もなく相談する人もなく、その為、病院で何が起ころうと何をされようかと殺されてしまえば死者は諸らず、病院はゆうゆうともうけつづけることができる。

年間三〇〇名以上の人が踏上で死んでいく金ヶ崎、それでは幸運にもこの病院にいられた人は？ Sさんの死は、鮮明に、病院の実態を暴露している。

アル中という診断で警察から精神病院へ、そして精神病院の実態は、Mさんといつておられる。又、昨年の泉ヶ丘病院の事件をみても、ひとさが推測されようというものだ。その上、あれ程さわがれつても奥探内部で何が起つて、いるかさえつかみようのない、全く隔離された精神病院が数知れず存在する。全く写るみにされずして、金ヶ崎労働者は殺されていく。

いったい結核の人が何人いるか、肝硬変と絶対安静の必要な人が何人いるか、病院から強制退院で追い出され、骨折が直りきれずにいる人、腰痛症をわすらったまま仕事を続けざるをえない人、そして労働災害の認定すらできず、使いすてにされてしまう労働者。

現在の腐りきった医療は釜ヶ崎のこのような状況を利用し露骨な正体を表わしている。それを認め、あるいは年間三〇〇名もの路上死者を知らぬ顔でみすこし、積極的に悪徳精神病院と手を結んで、釜ヶ崎労働者をアル中患者として送り込む行政。このような行政、このような病院を前に、我々が頼るべきものは唯一、我々の力だけなのである。

我々の力を体をなおさなければならぬし、我々の力でくさりきった医療をよくしなければならぬし、我々の力で釜をよくしていかなければならぬ。こうして、Sさんの死がきつかけで釜ヶ崎労働者が決起し、釜ヶ崎医療を考える会を結成した。

(谷川啓子)